

氏 名 靳 义君

学位の種類 博士(心理学)

報告番号 甲第363号

学位授与年月日 2013年9月30日

学位授与の要件 学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)
第4条第1項該当

学位論文題目 漸成発達理論からの青年期におけるアイデンティティの諸相の検討

審査委員 (主査) 大野 久

都築 誉史

佐藤 有耕(筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授)

I. 論文の構成と内容要旨

(1) 論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

第I部 理論的検討

第1章 序論

第1節 青年期におけるアイデンティティの形成に関連する研究の概観

1. アイデンティティ理論の概説
2. アイデンティティに関する理論モデル
 - (1) 漸成発達理論のライフ・サイクルモデル
 - (2) Marciaのアイデンティティ・ステータス理論モデル
 - (3) アイデンティティの3次元モデル
 - (4) アイデンティティの社会—認知モデル
3. 青年期におけるアイデンティティの形成に影響する要因について
 - (1) 親子関係
 - (2) 友人関係
 - (3) 学校あるいは教育環境
4. 青年期におけるアイデンティティと行動様式との関連について
 - (1) 青年期におけるアイデンティティと問題行動
 - (2) 青年期におけるアイデンティティと対人関係活動
 - (3) 青年期におけるアイデンティティと学業達成
 - (4) 青年期におけるアイデンティティと職業選択

第2節 従来の研究の問題点と漸成発達理論の導入の試み

1. 従来の研究においての問題点
 - (1) アイデンティティ・ステータスの理論上の問題点
 - (2) 青年期におけるアイデンティティ形成に関連する要因の範囲の広さ
2. 漸成発達理論から青年期におけるアイデンティティの形成を検討する意味

第3節 本論文の目的, 方法と構成

1. 本論文の目的
2. 本論文の方法
3. 本論文の構成

第II部 実証的研究

第2章 母子間の漸成発達主題獲得の関連性が青年のアイデンティティ達成に及ぼす

影響

- 第1節 問題
- 第2節 方法
- 第3節 結果
- 第4節 考察

第3章 中国の大学生のアイデンティティ形成と寮生活の雰囲気からの影響

- 第1節 問題
- 第2節 方法
- 第3節 結果
- 第4節 考察

第4章 青年期の愛着行動特徴と漸成発達の親密性の達成との関連

- 第1節 問題
- 第2節 方法
- 第3節 結果
- 第4節 考察

第5章 青年期における恋愛相手の選択基準とアイデンティティ発達との関係

- 第1節 問題
- 第2節 方法
- 第3節 結果
- 第4節 考察

第6章 漸成発達の初期段階における人格発達と青年期の愛着行動との関係

- 第1節 問題
- 第2節 方法
- 第3節 結果：分析1
- 第4節 結果：分析2
- 第5節 考察

第Ⅲ部 総論

第7章 総論

第1節 本論文の成果のまとめ

1. 母子間の漸成発達主題獲得の関連性が青年のアイデンティティ達成に及ぼす影響
2. 大学生のアイデンティティ形成と寮生活の雰囲気からの影響
3. 青年期の愛着行動特徴と漸成発達の親密性の達成との関連
4. 青年期における恋愛相手の選択基準とアイデンティティ発達との関係
5. 漸成発達の初期段階における人格発達と青年期の愛着行動との関係

第2節 総合的考察

1. 青年期のアイデンティティの形成は諸要素の複雑な影響の結果である
2. 青年期のアイデンティティの形成は能動的な発達の結果
3. 漸成発達主題の達成に有利な条件の重要性
4. 漸成発達の初期段階における発達主題の達成の重要性
5. アイデンティティの研究において、漸成発達理論を立場とする検討の有効性

第3節 残された課題，将来の研究課題への展望

文献

(2) 論文内容の要旨

本論文の目的は、Eriksonの漸成発達理論を理論的基礎として、青年期におけるアイデンティティの形成の諸相について検討することである。全文は3部から構成されている。

第1部すなわち第1章は、理論的検討である。青年期のアイデンティティの形成に関する様々な定義や理論モデルを整理し、先行研究をレビューした。さらに、従来のアイデンティティ研究は、青年期だけに注目して、研究が進められてきた問題点を指摘し、その中でアイデンティティ理論が提唱されたエリクソンの生涯発達の自我発達を理論化した漸成発達理論の立場から、また、アイデンティティ形成と関連が深いと考えられる母子関係、中国の大学生活における典型的な青年期の間関係の環境を提供する寮生活、青年期の次の段階である初期成人期の異性との親密性の形成などの要因を加味した上で、アイデンティティ形成を再吟味しようとする本論文の目的と立場について述べている。

第2部は実証的研究である。この部分は、第2章から第6章までの5つの章によって構成されている。

第2章では、母子間の漸成発達主題の獲得が青年のアイデンティティ達成に及ぼす影響について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。(1)人格発達の各主題において、個人内における各主題の得点の間には高い相関がある。(2)漸成発達理論の各主題の間にある母子間で初期段階の対応する主題との間には有意な正の相関がある。(3)母親の「基本的信頼感」と「自律性」の獲得は青年の「アイデンティティ達成」と正の相関がある。(4)青年のアイデンティティ形成は、母親からの直接の影響ではなく、青年自身が獲得した初期の人格発達の主題がより強く影響している。

第3章では、中国の大学生を調査対象として、3年間にわたって縦断的な方法で大学寮生活の雰囲気は青年期におけるアイデンティティ形成に及ぼす影響について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。(1)寮生活の雰囲気が良いほど「基本的信頼感」、「自律性」、「アイデンティティ達成」と「親密性」の形成は順調に進むことが示唆された。(2)潜在曲線モデルの分析により、「中国大学生の寮生活雰囲気」は「基

本的信頼感」の変化には有意な影響を与えないことが明らかになった。(3)「中国大学生の寮生活雰囲気」は「自律性」、「アイデンティティ達成」と「親密性」の時間的変化に有意な影響を及ぼすことがわかった。

第4章では、青年期の愛着行動の特徴と漸成発達の親密性の達成との関連について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。(1)愛着行動における不安次元も回避次元も、漸成発達の親密性との間に負の相関がある。(2)青年期の愛着行動における不安と回避は、親密性の達成と緊密な関係があるアイデンティティ達成の程度との間に負の相関がある。(3)青年期の愛着行動の特徴と成人期の親密性の因果モデルにおいて、女性の場合には不安が回避より親密性に影響するのに対して、男性の場合には回避が不安よりも親密性に影響を与える。

第5章では、青年期における恋愛相手の選択基準と漸成発達の各発達主題の形成状況との関係について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。(1)男女の恋愛相手を選択する際に10個の選択基準が明らかになった。(2)女性の「しつかりさ」をより重視する男性は漸成発達の各発達主題の形成のレベルが高い。(3)「性格的」なもので異性を選ぶ、もしくは「外見的」なもので異性を選ぶ、女性の2グループのS-ESDS (Erikson and Social-Desirability Scaleの日本語短縮版尺度)の各段階発達主題の得点において有意な差異は見られなかった。

第6章では、漸成発達の初期段階における人格発達と青年期の愛着行動との関係について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。(1)初期段階の人格発達である基本的信頼感と自律性は、いずれも青年期における愛着行動の不安と回避へ負の影響を及ぼす。(2)初期段階の人格発達の青年期における現れと青年期の愛着行動の関係モデルにおいて、不安と回避との間には中程度の有意な正の相関関係がある。(3)初期段階の人格発達からの影響は、男性の場合には不安への影響が回避への影響より小さいのに対して、女性の場合には不安への影響が回避への影響より大きい。

第3部すなわち第7章は総論である。この章では、実証的研究の結果をまとめ、青年期のアイデンティティ形成についての新しい知見や理解について論じている。結論としては、(1)青年期のアイデンティティ形成は、青年期の様々な領域においても漸成発達理論に示された各段階の発達主題と密接な関係がある。(2)母子関係からも、大学寮生活からもアイデンティティ形成は、影響を受けている。その関連に関しては詳細な検討が行われた。また、(3)アイデンティティ形成と親密性の形成も関連が高いことなどが示された。さらに本論文の不十分な点についても検討し、今後の課題を展望している。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

本論文は、これまで発達段階ごとに分割され、細かい人格特性ごとの比較検討に終始することが多かったアイデンティティ研究の問題点を指摘し、アイデンティティ理論を提唱した Erikson の本来の漸成発達理論に立ち返り、青年期のアイデンティティ形成を生涯発達心理学の視点から再吟味することを目的とした多角的なデータ収集による実証的研究である。

本論文は以下の点で評価できる。

第 1 に、漸成発達理論に基づいた発達主題間の関連に関する仮説は、母子関係、大学の寮生活、親密性との関連においてもいずれも支持され、総体として生涯発達の観点からのアイデンティティ形成のプロセスの一端を示すことに成功している。また、分析の過程でこれまで明らかにされてこなかったいくつかの知見を従来の研究に加えることに成功している。

第 2 に、第 2 章で行われている母子のペアデータに関する分析は、それまでその必要性は指摘されていたものの、実際に実証的データを有効に活用している研究は少なく、研究方法論的にも評価できる。また、分析の結果示された青年のアイデンティティ形成は、母親の発達主題に直接、影響されるのではなく、まず、母親からの影響で幼少期に子どもの初期の発達主題が形成され、その後、青年自身の中に形成されたその発達主題が青年のアイデンティティ形成に影響するというプロセスを明らかにした功績は大きい。

第 3 に、第 3 章の大学寮生活に関する研究で 3 年間の縦断研究を行っている点が評価される。縦断データの分析は、データ収集に時間と労力がかかり、それに比較して、得られる知見が少ないという理由から、必要性は強調されているものの、実際の研究事例は多くない。こうした状況の中で、中国の大学生のほとんどが経験する寮生活に関して、その重要さに着目したことは評価できる。また、分析においても、寮生活が影響する発達主題と、影響しない発達主題の弁別成功しており、今後の研究が注目される。

第 4 に、論文全体を通じて、多次元尺度構成法、成長曲線モデルや媒介変数の考え方を導入した構造方程式モデルに基づく分析など、高度な多変量解析に挑戦し、有効な知見を見いだすことに成功している。

以上、本論文は申請者の発達理論や分析手法に関する広範な知識と独自の発想、着実なデータ収集に基づく、精力的な研究であるが、もとより、本論文には不十分な箇所や問題点も含まれている。まとめて指摘すると、次のようになる。

第 1 に、生涯発達の観点からアイデンティティ形成を検討するという広範にわたる研究目的のため、一つ一つの仮説に関する検討が必ずしも十分とはいえず、それぞれの

仮説についてさらにデータの蓄積と検討が必要であろう。

第2に、幼少期の発達主題形成については、青年を対象に回顧的方法を用いているが、さらなる厳密さを求めるとするならば、幼少期から青年期にわたる10年単位の縦断研究が必要になるだろう。

第3に、著者が日本語のネイティブスピーカーではなく、言語的困難さがあり、本研究では、実施されなかったが、質問紙調査法のみでのデータ分析によることなく、面接、レポート分析などの質的データによる結果の妥当性の検討や数量データでは知り得ない発達の因果関係についての分析などの検討が今後必要になるだろう。

しかしながら、本論文は申請者が長年取り組んできたアイデンティティ形成に関する研究の集大成であり、得られた成果は上述のように高く評価できるものである。また、本論文に含まれる研究の多くは、学会誌、研究紀要等の査読付き原著論文として公表済みである。申請者は着実に研究成果を上げており、上述の課題も順次解明されることが期待できる。

以上のことを総合的に判断し、本審査委員会は本論文が期待される要求水準を十分に満たしたものであり、博士学位論文に値すると判断する。